TOM'S View

西頭　徳三 ― 富山大学長
相本　芳彦 ― KNBアナウンサー

融和と改革による地域社会への貢献を

新生富山大学のめざすもの

高岡（芸術文化系）キャンパス

杉谷（医薬系）キャンパス

昨年四月一日の国立大学法人化から一年半、今年一〇月一日、富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の三国立大学法人が再編・統合され、新たな富山大学が開学しました。新しく誕生した富山大学は、従来とどこが違うのでしょう。

二つの大きな変革を経て誕生した新生富山大学の西頭徳三初代学長に、大学運営への抱負や二一世紀新プロジェクトの構想、そして、ふるさと富山への熱い思いなどをうかがいました。

相本 芳彦（あいもと　よしひこ）

高岡市出身
1979年　慶應義塾大学を卒業後、北日本放送㈱に入社
2000年　報道制作局制作部長に就任
2005年　報道制作局制作専任部長兼ラジオセンター専任部長

西頭　徳三（さいとう　とくそう）

南砺市（旧福光町）出身
1968年　静岡大学農学部卒業
京都大学大学院農学研究科修士課程を修了し、
1980年　農学博士
山口大学助教授、愛媛大学教授、同副学長を経て、
2003年11月　高岡短期大学長に就任
2005年10月1日　富山大学長に就任
専門分野：農業経済学、土地改良費用負担論、水資源経済論

地域から信頼される総合大学を目指して

相　本　いよいよ一〇月一日に新しい富山大学が誕生しますが、その最高責任者である学長としての抱負をお聞かせください。

西　頭　新大学の運営方針は、融和と改革の二本立てでやっていきたいと思います。社会が大きく激動しているなかで、三つの大学が再編・統合によって一つの大学としてスタートするのは、日本でもおそらく最初のケースだと思います。そういう意味で、今回の再編・統合は非常に注目を集めています。

高岡短期大学は地元の伝統工芸と密接な関係がありますし、富山医科薬科大学は医学部と薬学部の二つの学部を有し、富山県の歴史や伝統産業を背負ったような大学です。さらに、地域に根差した総合大学である富山大学という、まったく異質な三つの大学が集まったわけですから、これからいかに融合させていくかが大きな課題といえるでしょう。また、対

五福キャンパス

外的には、大学としていかに地域に貢献していくかが課題であり、思い切った改革が求められると思います。

相　本　私たち一般市民から見ても、富大、医薬大、高短と呼んで慣れ親しんできた大学が一つになったものの、キャンパスは三つに分散したままですし、バラバラのような印象はぬぐえません。そういう垣根を取り払うのは大変なことじゃないかと思うんですが。

西　頭　確かに、相本さんがおっしゃる以上に困難な作業になると思います。私が学長をしていた高岡短大についてはよく知っていますが、富大も医薬大もそれぞれ特色を出そうとがんばってこられました。大学の性格が異なれば、目標も若干違っていて当然です。たとえば高岡短大の場合、伝統工芸都市を標榜する高岡市のイメージを背負っていますから、そういう面での産官学の連携が非常に進んでいました。

相　本　私も高岡市民なのでよくわかるんですが、高短の産業デザイン学科などは地域との連帯感も強くて感心していました。ああいうかたちを、ぜひ新しい学部のなかでも生かしてもらえるといいですね。

西　頭　三大学では、それぞれの歴史や特色に基づく教育、および研究システムが確立していました。ですから、目指すものは違っていて当然なのです。ただ、一つの大学になった以上は、ベクトルが同じ方向を向いていないと大学として機能しません。その辺が非常に工夫の要るところだと思っています。本当の意味でうまく融合させるには、かなり時間がかかると覚悟しています

相　本　それには、教職員の皆さんの意識改革も重要ですね。

西　頭　私も大学という組織で四〇年近く仕事をしていますが、「改革」という言葉はたった二文字でも、特にメンタルな面での改革を実行するのは容易じゃありません。だからこそ、これを成し遂げたところだけが二一世紀にふさわしい大学といえるのではないでしょうか。その辺を今後じっくり取り組んでいかなければならないと思います。

教育の充実を図り、創造的な人材を育む

相　本　一方では国立大学法人として、経営という部分も考えていかなければなりませんね。よくいわれるように、この先は少子化の時代がやってきますし、学生の皆さんにとって魅力ある大学づくりがより一層求められますね。

西　頭　ちょっと言い方を変えると、日本には私立大学もあれば、公立大学もありますが、国立大学は国から交付金をいただいて経営するというところが、私立や公立とは大きく違うところだと思います。運営費交付金もいただくけれど、国や地域社会、あるいは世界に貢献するという使命感を抜きには語れません。

新富山大学に限らず、少子化は大学にとって非常に大きな問題であり、そのマイナス効果は平成一〇年辺りから既に出ています。顕著なのは私立の短大ですが、国立も決して例外ではありません。特に定員の大きな大学は、定員割れを起こさないような工夫が必要です。

相　本　何か秘策はございますか？

西　頭　ありきたりの結論かもしれませんが、一番いいのは大学本来の姿に戻ることです。よく、大学は教育と研究の場、あるいは研究と教育の場だといわれますが、研究は先生方が教育をするための前提条件です。もちろん、研究できない先生では困りますから、それは一生懸命やっていただきたいのですが、教育は義務だと思います。これから生き残れるかどうかは、教育にいかに全力投球できるかにかかっています。一見遠回りのように見えても、大学での教育を充実させることに尽きると思います。

ユリノキ（五福キャンパス）

相　本　西頭学長は高岡短大の前任校である愛媛大学でも大学教育に熱心に取り組んでこられましたし、非常に効果をあげられたそうですね。

西　頭　中国地方も北陸地方も立地条件が非常によく似ていて、少子高齢化の影響を強く受けています。そこで私が考えたのは、教育には三つの特色があるということでした。つまり、非常に時間がかかるということ、やり直しがきかないこと、教育に関わる当事者の努力が、そのまま教育の効果に反映することです。その際の当事者とは学生自身であり、教員、あるいは職員のことを指します。教員にやる気がなければいい教育はできませんし、学生にやる気がなくても同じことです。時間がかかるとか、やり直しがきかないというのは小中学校にも共通していえることですが、いま特に問われているのは三番目の特色に対してどう答えるかです。そこで直接関係してくるのが、教職員の教育に対する姿勢です。

デッサン指導

八学部、二研究所、附属病院からなる総合大学として

相　本　新しい大学にはいくつか目玉になるような改革案がありますが、高短が芸術文化学部という名称になってパワーアップし、伝統を継承しつつ、さらに発展させようというのもユニークな取り組みですね。

西　頭　東京芸術大学に代表されるように、芸術家を育てる学校は全国にたくさんあります。ただ、高岡短大の場合、高岡市の伝統工芸の振興が開学の契機となったこともあり、二二年間、その辺りに傾斜した教育をやってきました。しかし、失われた一〇年といいますが、銅器にしろ、漆器にしろ、アルミにしても、産業界は非常に苦戦しています。そこで、地域を疲弊から救うためにも社会のニーズに目を向けようということで、新たに造形建築科学コースが設けられました。建築分野が設置されたのは県内の大学では初めてです。そして、もう一つの特筆すべきなのが文化マネジメントコースです。

臨床実習（画像診断指導）

相　本　「文化マネジメント」とは聞き慣れない言葉ですね。

西　頭　県内では、旧利賀村に鈴木忠志さんがやっているような芸術活動がありますし、各市町には特色のある美術館があり、八尾のおわら風の盆のような文化の香り高い催しがたくさんあります。それらの演出をお手伝いするとか、まだ顕在化していないものが富山にはたくさんあると思うので、そういうものを目に触れるような形にして、広く地域社会の文化をマネジメントするというのが大きな特色です。

相　本　お話をうかがっているだけで、すごく興味が湧いてきました。

西　頭　みんなそうおっしゃいますが（笑）、文化をマネジメントするというのは実は大変なことなんです。マネジメントの意味はわかるけど、じゃあ、具体的にどうすればいいのか。私もいろんな大学を見せてもらって話を聞くんですが、どこも非常に苦戦しています。教えるための人材を確保し、どこをターゲットにして、どういう人材を育てるかをより明確にしていかなければなりません。

相　本　三大学が築いてきた伝統と実績を生かしながら、新しい要素も加味して魅力を高めていこうというわけですね。

西　頭　医薬大は文部科学省の「二一世紀ＣＯＥ（卓越した研究拠点）プログラム」に採択され、着実に研究成果をあげてきました。それもさらに伸ばさなければなりません。

相　本　新設の芸術文化学部のほかに、旧富山大学の教育学部が改組された人間発達科学部など、全部で八つの学部、一つの研究所と附属病院が設置されるわけですが、大学院も変わりますか？

西　頭　より専門的な分野を学ぶための

大学院だけでなく、各学部の横断的な連携による大学院構想をもっています。理工系、医学系、および薬学の融合による大学院改革など、着実に実績を重ねながら、ゆくゆくは人文社会系の博士課程も設置したいと考えています。文系の博士課程がある大学は全国的にもまだ少ないので、これを新大学の大きな特色にしていきたいと思います。

新・富山大学の研究と教育のビジョン

相　本　新しい学長に就任なさることが決まってからのコメントに、「新富山大学二一世紀研究プロジェクト」という名称が何度も出てきますが、具体的な構想があれば教えていただけますか？

西　頭　これは、学長選の公約で私が掲げた構想です。二一世紀の社会では、凶悪犯罪や災害、国際的なテロ事件など、いろいろな面でリスクが高まっています。どこまで犯罪を防止して、安全な社会を維持できるのか。こういった問題は今までよその国の話だと思っていたのですが、富山のような地域社会においても無縁ではなくなっています。しかも、何が問題で、どこが原因かがわかりにくいのは、環境問題と非常によく似ています。原因を探るにしても、対策を立てるにしても、一部の専門家の対応だけではもはや解決できないところにきています。このようにリスクが高まっている地域社会の問題に貢献できるプロジェクトを称して、私は「二一世紀研究プロジェクト」と呼んでいます。これは融合型のプロジェクトで、八学部、一研究所と附属病院をもっているという本学の強みを生かして、それぞれの課題に合わせて成果が出るようなプロジェクトを組むことができます。

先程申しあげた大学院改革のねらいも、実はそこにあるのです。地域の実態に合わせて融合し、かつ問題解決に貢献できるような大学院でなければなりません。その地域の特性にふさわしいリスク回避の対策を考えられるのは、やはり大学です。理系だけでなく、人文社会系、芸術系など、大学の知的蓄積を総動員し、地元産業界や自治体と連携して二一世紀の地域社会モデルを富山から発信したいと考えています。

相　本　まず、大学の方向付けをしっかりしたうえで、実際に動き出すのはもう少し先になりそうですね。その際、大学改革を専門に担当する「大学戦略室」について詳しく教えてください。

理学部前（五福キャンパス）

西　頭　私が室長業務を担当し、数名の教員を配属して学長を補佐するポストを設けます。ここでは地域貢献事業の計画や人文社会学系の大学院設置、学部の教養課程から専門課程、そして大学院まで一貫した教育体制がとれる「高等教育センター」の新設に向けた準備、ポスト二一世紀ＣＯＥプログラムの獲得に向けた環境整備などを行い、新大学の独自色を打ち出していきます。

新大学の運営方針は融和と改革の二つあると申しあげましたが、融和とは、つまり現状をいかに融合させて、現在の教育に責任をもつかということで、これは六名の新理事に担っていただきます。そして、新しいプロジェクトや研究、大学院改革、地域連携など、改革の原案は大学戦略室の先生方に専門に進めていただき提案いただこうと思っています。

相　本　なるほど。それぞれ役割分担して、お互いに連絡を密にしながらやっていくということですね。

野外実習（活断層調査）

地域に根差した改革で開かれた大学に

西　頭　地域共同研究センターでは、企業からの申し出を各先生方につなぐお世話をしていますが、八つの学部、一研究所と附属病院に対して十分に機能的に対応できるのかどうかが問題です。文系の先生方の研究が十分に拾いきれないようであれば、何か方策を考えなくてはなりません。今後は社会・人文科学系の参加を促進して、文系の大学発ベンチャー企業も立ち上げたいと考えています。

相　本　産官学のスムーズな連携によって学生さんに学ぶチャンスを提供し、地場産業に貢献するとともに、卒業後の進路選択に役立てたり、研究成果を新入生にＰＲすることもできそうですね。

西　頭　社会保障や医療制度が崩れ、家族や親子関係が崩壊し、社会全体が崩壊しつつあるといわれるなかで、二一世紀の富山がよって立つのは何かと問われたとき、我々がその答えを出さなくてはなりません。

相　本　先程は少子化の問題についてうかがいましたが、既に社会人として仕事をし、リタイアされるような年代のなかにも学びたいという意欲をもった方が大勢いらっしゃいます。そういう方たちのニーズを生かす手段はどこかにありそうですか？

生涯学習を支える取組

西　頭　自分のことを申しあげて恐縮ですが、私は平成一一年、愛媛大学大学院に、全国初の「社会人リフレッシュコース」を作りました。今の大学には一定の年齢の学生だけが集まっていて、ある意味では非常にクローズされた世界です。その閉塞感を打破するのは何かと考えたとき、もっと社会人を受け入れようと思ったのです。最初は半信半疑でしたが、いざフタをあけて見ると、実にいろんな方たちが全国から集まってきてくれました。そして、企業の社長職をリタイアした七〇代の男性が、白衣を着て若い学生と一緒に研究に携わるような光景が日常的に見られるようになりました。そうしますと、大学の雰囲気ががらっと変わってくるんです。そこで初めて、リフレッシュコースは社会人のためだけでなく、現役の学生にとってこそ重要なのだと気づきました。もちろん、当の社会人の皆さんにも喜ばれましたし、大学にとっても大きな成果がありました。

相　本　二〇〇七年問題で団塊の世代が第一線から退きますが、そういう人たちの能力をもっと生かすことも可能ですね。

西　頭　何度も申しあげますが、八学部ありますから、自分に合った学部を探して、もう一度勉強したいという人が当然出てくるでしょう。雇用対策の一つとして、大学もそういう形でお手伝いできればと思いますし、それが地方の大学の大きな役割でもあると思います。

相　本　先生ご自身が富山県で生まれ育った方ですから、地元の新生大学の初代学長に就かれることへの感慨も一入（ひとしお）でしょうね。

西　頭　それは感慨深いものがあります。昔は高岡駅前に高岡劇場という映画館があって、高校時代は日曜日に福光町から映画を見にくるのが楽しみでした。「風と共に去りぬ」なんか、すごく懐かしいですね。

相　本　私も高岡市の生まれですから、高劇ではずいぶん映画を見たものです。

西　頭　その頃の高岡市のにぎわいが脳裏に焼き付いていたので、久しぶりに郷里に戻っておたや通りを見たとき、あまりにも人が歩いていないのでショックを受けました。ただ、高岡に人がいなくなったわけではなくて、商店街を歩いていないだけ。非常にいいお店も残っているし、地元の人はみんな元気です。生まれ育った土地というのは、やはり違いますね。長く離れていても、一週間もすればすっかりなじんでしまいますから。ただ、四〇年も標準語をしゃべっていたせいでしょうか、スムーズに富山弁が出てこないのが残念です（笑）。

相　本　故郷への愛着は、かなり強いとお見受けしました。

西　頭　そりゃあそうですよ。松山でテレビを見ていても、「富山」という名前が出ると、パッと目がいきましたから。

相　本　ふるさとへの熱い思いを含めて、学生さんはもちろん、ちょっと年齢が上の方たちも含めて、いいかたちで学べる場所であり、学んだことを生かせる状況を作っていただきたいと思います。

西　頭　六名の理事の顔ぶれも決まり、大学の運営に全力投球できる体制が整いました。あとは、二千人を超える教職員の皆さんの協力が不可欠です。その辺は、ぜひお力添えをお願いしたいと思います。

相　本　おおいに期待しております。きょうはどうもありがとうございました。

この対談は九月六日に行われました。

みら〜れ！新富山大学広報誌

TOM'S PRESS

ISSN 1346−3640
VOL.1 OCT. 2005

創刊号

TOM'S View

融和と改革による地域社会への貢献を

――新生富山大学のめざすもの

西頭德三 富山大学長　相本芳彦 KNBアナウンサー

杉谷（医薬系）キャンパス

みら〜れ！新富山大学広報誌 TOM'S PRESS トムズプレス【創刊号】

発行日　平成17年10月1日　発行　国立大学法人富山大学　●問合せ先：富山大学総務部総務課広報室　〒930-8555 富山市五福3190　TEL 076-445-6027　FAX 076-445-6033
E-mail：kouhou@au-toyama.ac.jp　■トムズプレスはインターネットでもご覧いただけます。http://www.u-toyama.ac.jp/　印刷・製本　株式会社ニッポー

■新・富山大学キャンパス■

University of TOYAMA / Campus Guide

高岡（芸術文化系）キャンパス

芸術文化学部

杉谷（医薬系）キャンパス

医学部
薬学部
和漢医薬学総合研究所
附属病院

五福キャンパス

事務局
人文学部
人間発達科学部
経済学部
理学部
工学部

■次号（第2号）の予告

次号では、新・富山大学の中でも教育や研究体制が大きく変わった3つの学部を紹介します。人間発達科学部（五福キャンパス）・薬学部（杉谷キャンパス）・芸術文化学部（高岡キャンパス）がどのように変わるのか、3つの大学が1つになったことでどんなメリットがあるのか、などについて現在取材中です。乞うご期待!!

新・富山大学Q＆A

新しい富山大学についてわからないこと・知りたいことがありましたら、広報室までご連絡下さい。次号では、皆様からの様々な疑問にお答えするコーナーを作る予定です。どんどんご質問をお寄せ下さい。

【編集後記】

いよいよ新・富山大学がスタートしました。新しい広報誌TOM'S PRESSを皆様にお届けします。これまでTOM'S Magazineをご愛読下さった方も、今回初めてこの雑誌を手に取られた方も、これからよろしくお願いします。TOMsの由来は、富山大学のという意味に豊かさを表す「富む」ということばを掛けたものです。

創刊第一号では、新・富山大学の学長から皆さんへのメッセージをお届けしました。新しい富山大学のビジョンが皆様に伝わったでしょうか。これから、新しい富山大学をどんどん紹介していきたいと思います。難しくてお堅い雑誌ではなく、ユニークな研究、面白い人物、キャンパスライフなどを、地域の皆さんにわかりやすく紹介する面白い読み物を目指したいと考えています。統合までの道程はとても遠かったのですが、ようやく新たな一歩を踏み出しました。第二号では、三つの学部の先生方に新しい大学にかける夢を語ってもらいます。どうかお楽しみに。（M.K）

●本誌は、大学構内などで無料配布しています。郵送のご希望もお受けいたします。
●本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。
●無断転載はご遠慮ください。
●本誌は、古紙100%の再生紙と大豆インクを使用しています。

TOM'S PRESS 編集委員会

林　夏生　人文学部助教授
岩島　誠　薬学部助教授
五十嵐藤子　附属病院副看護部長
小林　真　人間発達科学部助教授
山田　茂　工学部助教授
高井　正三　総合情報基盤センター教授
唐渡　広志　経済学部助教授
小松　研治　芸術文化学部教授
仲嶺　政光　生涯学習教育研究センター講師
森脇　喜紀　理学部助教授
門脇　真　和漢医薬学総合研究所教授
長島　寛　総務部総務課長
鏡森　定信　医学部教授